

大学における子育て支援の取り組み（2）

－「赤ちゃん・サロン」2年目の報告－

Building a Supportive Environment for Child Rearing at the University (2)

－ A Report of the Second Year of “Baby Salon”－

山 森 泉*¹、熊 田 凡 子*²

要旨

本稿は、「大学における子育て支援の取り組み（1）－北陸学院大学における『赤ちゃん・サロン』の試行と環境づくり－」に続くものである。その後の取り組みと学生の主体的かかわりの中の成長・学びについて考察するとともに、全国の保育士養成4年制大学を対象としたアンケート結果との比較を行った。その結果、大学キャンパス内で子育て支援の場所を提供し、月1回以上の頻度で開催することが、保育者を目指す学生の成長・学びに関連していることが示唆された。また、保育者の専門性の一つである「チームワーク」も、子育て支援の活動を通して身に付けていくことが期待できる。

キーワード：子育て支援 (child rearing) / 3歳未満児 (children younger than three years old) / 学生の学び (student learning) / アンケート調査 (a questionnaire)

1. はじめに

子育て支援の重要性が叫ばれる昨今、子育て支援に関する政策も種々検討されており、認定こども園への移行を中心に少しずつ子育て環境が変化しつつある。しかしながら、好転しているとは決して言えない状況は現在もある。2016年2月には、定員超過により子どもが保育所に入所できず退職せざるを得ない母親の切実な訴えを巡って、多くの議論が沸き起こった。虐待が疑われながら両親のもとに幼児を還し、結果として両親によって命を奪われる子どもも後を絶たない。子育てを相談できる相手がないため、孤立して子どもと二人だけで過ごす密室育児の状況も深刻である。

このような中、保育者養成を行う大学として、子育て支援にいかにかかわっていくか、学んでい

る学生にどのように保育者としてふさわしい力を付けていくか、子育て支援の取り組みに関して、在学中にどこまで理解し、現場で対応できる視点を養っていくかなど、今後ますます、重要度を増していく。

このような状況を踏まえ、2015年度6月～7月、「北陸学院大学 子育て支援に関する研究チーム」¹として、全国の保育者養成4年制大学209校を対象にアンケートを実施した。これは、少子化対策・子育て支援政策として、各自治体、NPO、保育所、幼稚園、こども園などにおいて「子育て広場」・「子育てサロン」が実施されている中で、大学が果たす役割と自治体などと協同行う取り組みについて、現状を探るとともに課題を抽出し、“大学の良さを生かした取り組み”の方向性を示すことを目的として行ったものである。

アンケートの回答からは、多くの大学が子育て支援に取り組んでいる実態と課題が見えてきた。本稿においては紙面の制約の関係上、その一部の紹介に留まるが、「大学として行う子育て支援の

*¹ YAMAMORI, Izumi

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
保育実習、日本語表現法

*² KUMATA, Namiko

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
乳児保育、保育内容・言葉、保育実習、幼児理解

あり方」について、先行調査報告との比較をしながら全国の実態を踏まえて検討していく。

本学で取り組んでいる子育て支援「赤ちゃん・サロン」は、2014年度9月からの半年間の試行を経て、2015年度から本格的にスタートした。2年目となる2016年度現在、一定の成果と今後の課題が見えてきている。本稿では、全国の保育者養成大学を対象に実施したアンケートと比較しつつ、2015年度の実施状況を参考に、本学の取り組みの独自性と有効性についても併せて考察を加えたい。

2. アンケート結果の概要と考察

2-1 アンケート実施と先行調査研究

1) アンケートの概要

アンケート実施は、以下の要領で実施した。
対象：2015年5月現在、全国保育士養成協議会に加盟している国公立の4年制大学209校を対象とした。

方法：質問紙による調査を実施し、2015年6月～7月、郵送により依頼した。61校からの回答があり、回収率は29.1%である。

結果分析：すべての結果及び分析・考察については、別に発行する報告書にまとめる。本稿においては、「子育て支援組織の有無」、「地方自治体との連携の実態と課題」、「学生の成長につながる子育て支援について」を取り上げる。

2) アンケートの回答者

アンケートの回答に関しては、子育て支援事業をしている大学では「運営主体の学部・学科の責任者」に、未実施の場合には「保育者養成学部・学科の代表者（学部長・学科長・学科主任など）」に回答を依頼した。回答者の内訳は、学部長4校、学科長9校、学科主任5校、事業責任者13校、子育て支援センター長など4校、その他24校（有効回答58校）であった。「その他」の回答内容は、詳細未記入が4校、「エクステンション課」1校以外は19校すべて教員である。具体的には、実習担当教員、保育担当教員が複数校あったほか、実習センター長、教職センター長、コース主任、コース責任者、保育士養成課程委員会委員長、保育士養成カリキュラム委員長、修学前カリキュラム研究開発室長

（教授、副理事）、保養協ブロック理事など、責任ある立場で現場サイドに近い方々からの回答が多く得られた。

3) 先行調査研究

今回実施したアンケートと同種の調査は、過去複数の研究チームが実施している。例えば、「保育者養成における子育て支援研究会」²⁾(研究代表者：小原敏郎・共立女子大学。以下小原ら)は平成25年10月～12月に大学・短期大学・専門学校合わせて565校を調査対象として実施し、33.6%に当たる190校から回答を得ており、そのうち4年制大学は71校あった。アンケート内容の本学との類似点、相違点については別項目で述べるが、小原らの調査の大きな特徴は、大学キャンパス内での実施形態を「ひろば」型、「教室」型、「鑑賞・発表会」型に分けて集計をしている点である。また、「学生が身に付けることが期待される知識・技術」に関しては、27項目（本学は16項目）に細分化して聞いている点も特徴と言える。

矢萩恭子らの「保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究(2)」³⁾(以下、矢萩ら)では、パイロット調査として実施しているため、関東ブロックと九州ブロックの2か所が対象である。回収率は33.2%であるが、4年制大学の回答数は少なく、27校であった。この調査は、主に、子育て支援施設との連携に比重を置いており、「地域の子育て支援施設へ学生を送り出すねらい・目的」に関するまとめと、「保育者養成校と子育て支援施設が連携する意義・課題」に関するまとめの2点を中心とした成果報告である。

これらの調査結果との比較については、本稿では、以下の項目に限定して述べていく。その他については、報告書において比較考察を行う。

2-2 子育て支援組織の有無

本質問項目に対する有効回答は59校であった。このうち、子育て支援組織がある大学は23校(39.0%)、組織を持たない大学は36校(61.0%)であった。子育て支援に関する組織の有無にかかわらず59校中48校(81.4%)が、「学内場所を提供して子育て支援を行う」「子育て支援に関する

イベントを開催する」「講演会や研修会を開催する」「外部の機関などの子育て支援の取り組みに協力する」のいずれかを実施しており、子育て支援の取り組みを保育者養成大学の責務と捉えている実態が把握できる。

表1は、子育て支援組織の有無と子育て支援に関する取り組み状況のクロス集計である。

表1 子育て支援組織の有無と取り組み状況

取り組み組織(部署)	学内場 所提供	学外場 所提供	イベン ト開催	講演会 研修会	外部へ の協力
あり23校 (39.0%)	20校 (87.0)	2校 (8.7)	17校 (73.9)	16校 (69.6)	14校 (60.9)
なし36校 (61.0%)	14校 (38.9)	2校 (5.6)	19校 (52.8)	6校 (16.7)	20校 (55.6)
合計59校 (100%)	34校 (57.6)	4校 (0.7)	36校 (61.0)	22校 (37.3)	34校 (57.6)

表1から分かるように、子育て支援に関する学内組織を持つ大学23校では、87%に当たる20校が学内での場所提供をしているが、学外での場所提供をしている大学は2校だけである。「イベントの開催」・「講演会・研修会の実施」を70%前後に当たる17校が行っている。また、「外部組織への協力」も60%に当たる14校が行っている。

一方、学内組織を持たない大学36校では、最も多い取り組みが「外部団体への協力」20校（56%）・「イベントの開催」19校（53%）であり、「学内での場所の提供」は14校（39%）と少なく、「講演会・研修の実施」は6校（17%）に留まる。子育て支援組織の有無や開催内容と学生の学びとの関連については、後述する。

2-3 地方自治体との連携の実態と課題

本質問項目に対する有効回答は、59校であった。子育て支援取り組み組織を持っているかいないかを問わず、外部団体（NPO・自治体）が主催する講演会・イベントに約6割（34校）の大学が協力している（表1参照。「外部への協力」）。その中で自治体と実際に連携している大学は、30校（50.8%）である。このうち、どちらからの働き掛けによるのかの質問では、66.7%に当たる20校が、「自治体からの協力依頼」によるものであり、「大学から打診した」のは16.7%に当たる5校、「そ

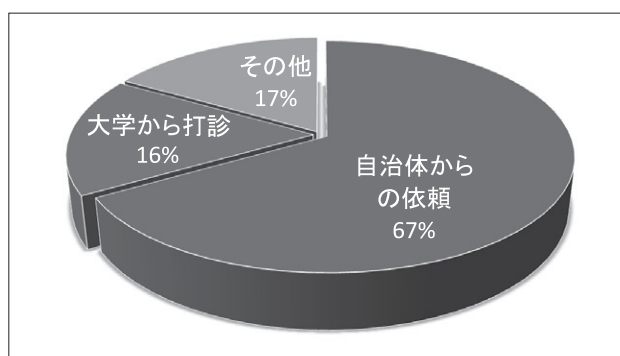


図1 自治体との連携の働きかけ (N=30)

の他」も5校（16.7%）であった。地域における子育て支援の必要性から、自治体が専門分野を有する大学に依頼している実態が明らかである。

大学として、「自治体と連携していることのメリット」（複数回答可）として最も多いのは、「連携を通して、大学の人的資源・研究に対する理解が深められる」15校（25.4%）であり、続いて「自治体がついていることで広報上のメリットがある」11校（18.6%）、「自治体がついていることで、費用面の負担が少ない（支援がある）」10校（16.9%）、「自治体がついていることで、参加親子が安心して参加している」8校（13.6%）であった（図2参照）。

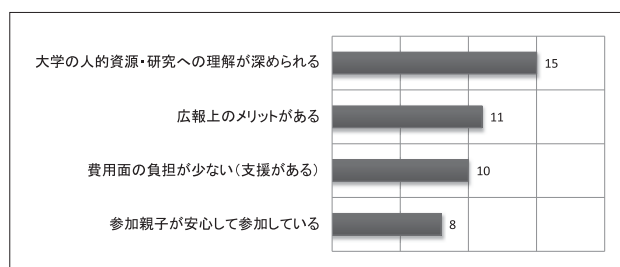


図2 自治体と連携するメリット

その他、複数校が回答として挙げたのは、「自治体がついていることで場所の利用がスムーズにできる」5校（8.5%）「自治体がついていることで人的サポートが得られる」4校（6.8%）であった。

一方で、自治体と連携することの課題について、「特になし」との回答は14校（23.7%）であった。実施に際し「日程・時間の制約がある」が8校（13.6%）、他に、「予算上の使用制限がある」「予算申請・事業計画など書類作成が負担」「事業計画で企画に制限がある」・「学生の参加に対して制限がある」との回答が3～4校ずつあった。他に、

自由記述では、「自治体の方が『大学に任せたい』という態度を取られると困る。大学も授業のやりくりや学生の問題など、多忙な毎日であるので、協力的な姿勢を見せてほしい」「大学側の方針が先行し、自治体側の要請との折り合いが付いていなかったようだ。連携には十分な準備と合意形成が必要であると感じた」などの、当事者ならではの課題意識が記されていた。大学側、自治体側双方に連携したいとの思いがありながら、自治体ならではの制限をどのように解消していくか、また自治体側の担当者と大学側の担当者の合意をどのように図っていくかについて、連携の際に充分協議しておくことが肝要と言える。

2-4 子育て支援への参加と学生の成長・学び

本質問項目に対する有効回答は57校であった。「大学の学生にとって、子育て支援への参加はどのような成長・学びにつながると感じますか」に対し、回答は項目ごとに、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法とした⁴ (表2参照)。

表2 項目7 子育て支援と学生の成長・学び

項目	大学の学生にとって、子育て支援への参加はどのような成長・学びにつながると感じますか。最も当てはまる番号一つに丸を付けてください。
①	乳幼児の実際の姿に触れて、子ども理解を深め、子どもの発達を理解し、月齢・年齢による遊び方の違いを知る
②	子育て中の親子の姿を知る機会となる
③	子育て中の親子の話を聞く機会が得られる
④	子育て中の親同士のかかわりを見る機会が得られる
⑤	子育て中の保護者とかかわりを学ぶ
⑥	子育て支援の方法を学ぶ
⑦	子育て支援の意義や機能を学ぶ
⑧	乳幼児同士のかかわり(育ち合い)を知る機会となる
⑨	乳幼児への接し方を体系的に学ぶことができる
⑩	環境設定など、学生が主体となって計画する場を持つことで子ども理解が深まる
⑪	実習と異なり、評価を意識せずのびのびと参加できる
⑫	事前準備・事後振り返りなど、複数の学生が話し合い協力する姿勢を身に付けられる
⑬	異学年が同時に参加することで上級生から学ぶ機会がある
⑭	学生が手遊びやゲーム、子どもとの遊び、絵画や工作等の制作力、歌やダンスなどの表現力を身に付ける
⑮	保育者としての意識を学ぶ機会となる
⑯	外部の機関や団体、地域の方々とかかわり方を学ぶ

図3は、表2の項目の平均値を降順に表示したものである。全項目の平均値は3.26である。多く

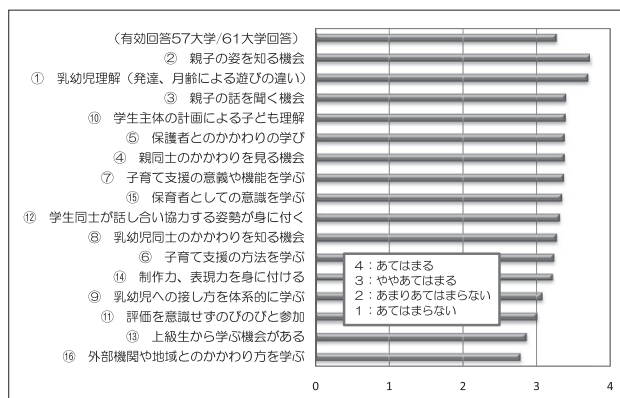


図3 子育て支援への参加と学生の成長・学び (N=57)

の回答者は、子育て支援の取り組み自体が何らかの形で学生の成長・学びにつながっていると受け止めている。最も高かったのは、②「子育て中の親子の姿を知る機会となる」の3.72である。保育士の業務の中に子育て支援が含まれており、本学では実習課題の一つとして、実習園で行っている子育て支援の取り組みに参加する(または、聞き取り調査を行う)ことにしているが、それでも親子の姿に接する機会は極めて少ない。このような中、「大学で子育て支援の取り組みを行うことが、乳幼児とその親の姿に接することの学び」につながっていると捉えてよいであろう。

次に、図4は、図3の大学別平均値を2.5未満、2.5~3.0未満、3.0~3.5未満、3.5~4.0に分けて記した分布図である。大学ごとの平均点では、特徴的な傾向として以下の点が挙げられる。有効回答57大学の平均3.26に対し、3.0未満の回答となった大学は15大学あった。そのうち10大学は、「乳幼児とその保護者を対象として学内の場所を提供していない」、または「年に1~2回程度の実施」に留まっていた。さらに、授業として学生を参加させている大学は15大学中5大学であるが、うち3大学

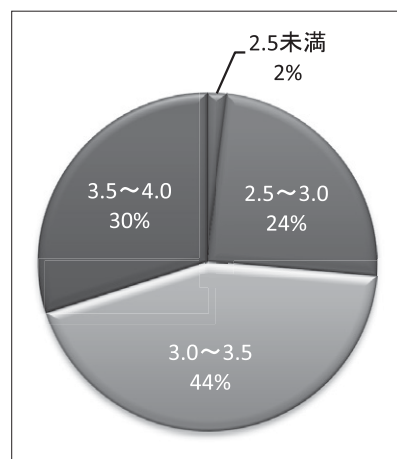


図4 各大学平均値区分 (N=57)

は年1回のみでの参加であった。

一方、毎月1回以上大学内の場所を提供している大学は、22校であった。そのうち授業として学生が参加している13大学では、3.5以上の高評価が6大学、3.0～3.5未満が6大学であり、3.0未満の大学は1大学であった。この数値から、継続的に学生が子育て支援にかかわっている大学の場合はポイントが高く、かかわりが希薄である大学の回答ではポイントが低いという傾向が示された。

3. アンケート結果の考察

図4に示された平均値帯と、各大学で実施している子育て支援の取り組み状況をクロス集計したものが、図3である。図4の平均値帯ごとに、実施している割合（%）を表示した。

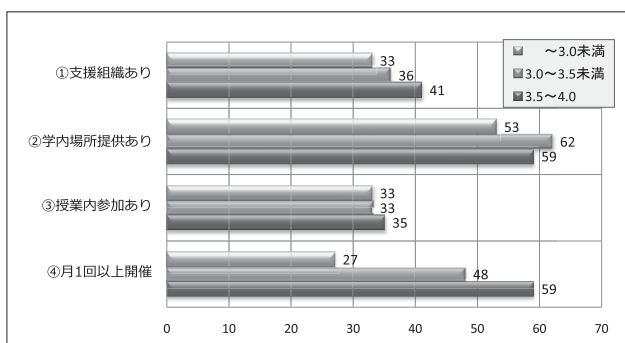


図5 平均値別の実施率比較

上記グラフでは、①「子育て支援組織がある」大学は、どの区分帯でも33%～41%と半数以下である。②「学内の場所提供あり」については、それぞれの区分帯で約60%の大学が、子育て支援の取り組みに学内の場所を提供している。③33～35%の大学では、授業の一環として学生が子育て支援の取り組みに参加している。以上①～③の比較では、区分帯による大きな差は見られない。

しかし、④では、大きな差が見られる。これは、「月1回以上、子育て支援の場を提供している」と回答した割合を、大学別の平均値帯で見たものである。学生の学びが3.5以上の高評価の大学では、約60%の大学が月1回以上開催している。3.0未満と低い評価の大学では、27%しか月1回以上開催していない。以上から、開催頻度が学生の成長や学びに大きく影響していることが分かる。

次に、平均値帯別の比較ではなく、学内での開催頻度が月1回以上あるかないかで、各大学が学

生の学びをどう評価しているかを、単純平均値のみで比較したのが図6である。

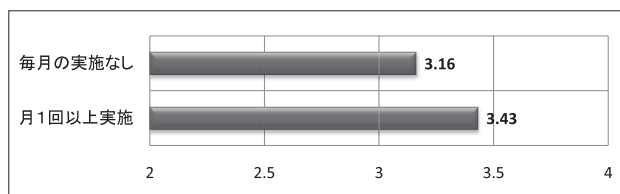


図6 開催頻度による学生の学び

有効回答57大学のうち、グラフの上の横棒は、「学内に子育て支援の場所の有無を問わず、月1回以上の頻度で子育て支援の提供をしていない」大学25校の平均が3.16であることを示している。下の横棒は、「学内に子育て支援の場所があり、そこで毎月1回以上の頻度」で子育て支援に取り組んでいる22大学の平均値は3.43であることを示している。

さらに、授業との関連づけを示したのが、図7である。

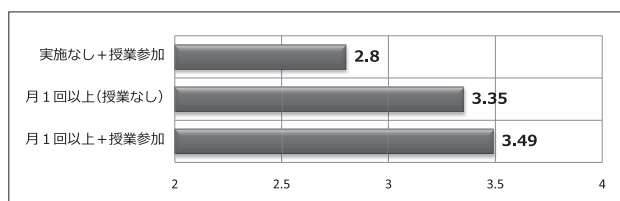


図7 実施形態・開催頻度による学生の学び

グラフ一番上の横棒は、子育て支援に関して授業内での学生の参加の機会を持っているが、月1回以上の頻度での開催をしていない6大学の平均を示しており、このケースでは、2.80と低い評価となる。グラフ真ん中の横棒は、月1回以上の開催場所を提供しているが、授業での参加を促していない9大学であり、平均は3.35である。一番下の横棒は、毎月1回以上の頻度で学内での場所を提供し、かつ授業で学生の参加を促している大学であり、平均値が3.49と最も高くなる。大学数が少ないため偏りが生じていると思われるが、回答した大学の担当者のおおよその傾向が見える。毎月1回以上学内で子育て支援の場所を提供し、授業で参加する機会を持つことで、学生にとって学びの効果がより高い数値となっている。

この数値を当然の結果と捉えることもできようが、自治体や保育施設が行う子育て支援ではなく、

「保育者養成大学が行う子育て支援」である以上、筆者らは、第一に学生の学びと成長に寄与できる取り組みであることが望ましいと考えている。この点に関して本学の実践を「4 赤ちゃん・サロン参加学生の気づきと学び」として記し、併せて考察したい。

4. 赤ちゃん・サロン参加学生の気づきと学び 4-1 サロンの概要

本学では、保育者を目指す学生が、実習では体験の機会を得にくい「乳児とその保護者に直接触れあう体験を定期的に持つ」ことにより、「乳児保育」や「保育実習指導」の授業で学んだ知識を、「サロン」での個別的関わりを通して身に付ける機会として、2015年度も月1回の開催を継続した(2016年度も継続中)。

「サロン」の活動は特定の授業ではないため、参加学生は複数授業の履修者である。活動の中心は4年生メンバー(スタッフ)であるが、1~3年生まで有志の参加が可能であり、より関心のある学生の学びを深められるという利点がある。中心メンバーは、筆者らのゼミ学生であり、彼らが継続的にかかっている。さらに、「サロン」

での体験や気づきを授業での発表に活かすことで、往還的な学びが期待できる。また、実習を含めこれまで大学で学んだ知識を統合して活用し、学生、特に4年生には主体的に活動内容を考え、展開していくことにより、多様な力を付けることを目標とした。具体的には、保育者として必要な「乳幼児の発達」に関する知識の獲得、乳幼児との個別的対応、保護者とのかかわり、企画力、環境構成の実践、毎回の協議、振り返り、記録を付けるなど。

以下に、活動の流れを記す。

①事前の活動

- ・毎回の内容についての学生スタッフでの打ち合わせ(当日の環境構成、進行、役割分担)を行う。
- ・準備物作成(遊びの場・玩具・大まかな時間の流れを記した環境構成図の作成と、それに基づいた環境設定)も、学生自らが行う。

②当日の活動⁵

- ・使用教室の清掃・環境構成を行う。
- ・受付、ビデオ撮影、記録(環境図、子どもの動きなど)の各担当と全体の把握を行う。
- ・乳幼児や保護者とのかかわり、個別対応につ

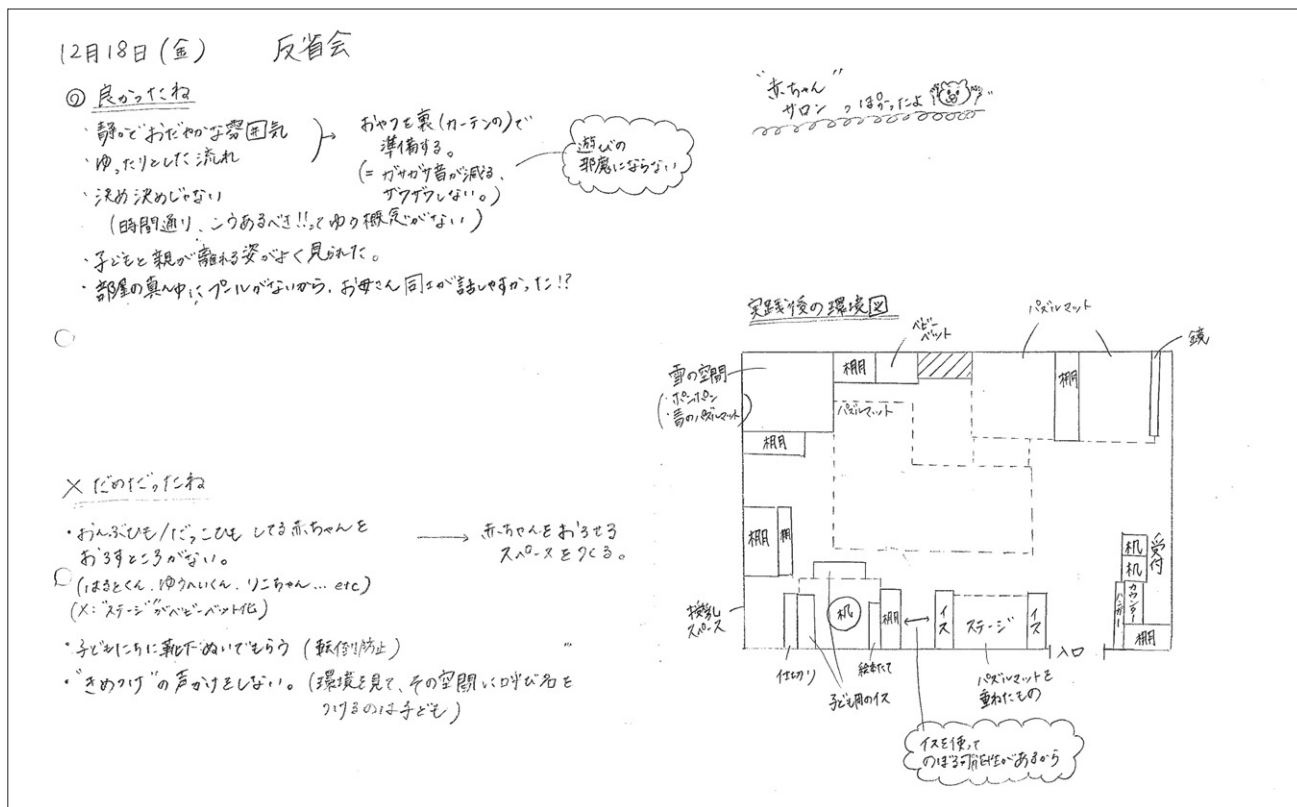


図8 2015年度の環境図と記録

いては、その場に応じて行う。

- ・出し物の担当は、事前の確認通りにならない時もあり、適宜変更しながら行っている。

③事後の振り返り

- ・環境図・ビデオ・記録を見ながらスタッフ学生と指導教員で話し合い、次回への課題・視点をまとめる。
- ・役割分担の中で、当日の実際の環境図と子どもや保護者、スタッフの動き、エピソードなどを記録する。

④長期的視点での活動

- ・毎月の参加乳幼児の発達について、一般的なものと個別なものについて、気づきを共有する。
- ・参加する保護者の悩み・課題について教員を中心に受け止めながら、文献などで調べたり、継続的に意図をもってかかわったりしながら、子ども・子育て支援のあり方について考えていく。

4-2 年間を通した気づき

一年間の活動を通して4年生がまとめた気づきは、以下の内容となった。

- ・子どもは神さまから与えられた大切な存在であり、子ども時代に存分に愛されることを味わうべきである。子どもらしくいられる充実した時間、選択できる環境、大丈夫と感じる安定した場を考えていく必要がある。
- ・単にサービスすることだけでなく、親子が共に成長する力が与えられるような支援でありたい。親として育つ力、地域が育つ力、いずれも引き出される機会として「赤ちゃん・サロン」に取り組みたい。
- ・保護者もいるので、学生にとっては、実習とは違う空気の中で安心して学ぶことができる場である。
- ・学生にとって実習とは違い、自分を柔軟に出せる場であり、保護者の方が見守る中で学べる場である。
- ・親子との直接的な触れ合いによって、私たちが親子と一緒に育ち合うことができると思う。
- ・親子と触れ合いを通して、母親の気持ちや子どもの思いに寄り添うということを経験した。

- ・「赤ちゃん・サロン」は学生と親子と一緒に創り上げていく居心地のよい環境であり、今後も続けていきたい。後輩たちにこの思いを伝えることが必要であろう。

上記に示したように、本学4年生は「赤ちゃん・サロン」のスタッフとして2年間経験することで、当事者意識が高まったと思われる記述が見られる。

一方で、3年生の気づきでは以下ようになる。

- ・実習のように気を張らずに、気楽に子どもと接することができ楽しかった。
- ・保護者の方もいるので、その場で生の声を聞くことができた。
- ・小さい子どもが自分よりも年上の子を見る。上の子子どもが小さい子どもを見るというように、色々な年齢が混じり合っているので、保護者がいて安心しながらお互いに刺激を受ける場であると感じた。



図9 赤ちゃん・サロンの一場面

- ・保護者同士の会話を聞いていると、子育てや子どもの育ち、その他の情報を確認合っていると感じた。
- ・お母さんたちが楽に話し合っているように見えた。
- ・赤ちゃんの肌って柔らかい。眠っている時の赤ちゃんは温かい。ずっと赤ちゃんを見てしまう。飽きない。改めて可愛いと思った。
- ・いつもは新聞プールであるが、今日は真ん中にお風呂のプールを置いてあり、子どもたちはその空間で遊びをスタートさせて、その中で母親が母親同士で話し合う場となっていた。天井からは布が吊るされて包まれるような空

間でフワフワしていて、色んな色の空間を作っていたことに、先輩たちは、すごいと思った。

以上のように、3年生の気づきでは、親子との実際的な関わりを通して、乳児の発達を実感する、あるいは、子育ての大変さや喜びを共感するという、実際の姿を通じた経験となったようである。

これまでの自分たちが出向いて行っていたプレ体験⁶や実習では、やはり表面的な子ども理解、保育の学びに留まっていたのかもしれない。しかし、自分たちの学び舎で行っている親子支援では、学生が乳児の発達を自ら感得し理解を深めている点が現れていることは、大学キャンパス内で学ぶということに期待ができる活動であると言えよう。また、子どもとかかわったり保護者と会話したりする先輩の姿を、間近で見ることによる影響も大きい。保育者のように振る舞う4年生に憧れを抱く学生がいたり、自分自身の姿を振り返ることに結びつけてみる学生がいたり、と、上級生と同じ場で活動することを通しての気づきも、学生一人ひとりが異なり、一様ではない。学生には3年から4年生に向かう中で、この機会を活用し、保育者として自分には何が必要かを考え、より専門的な内容を学ぶ意欲へと展開していくことが望まれる。

4-3 学生の学び—「卒業研究」への発展

「赤ちゃん・サロン」における親子との出会いがきっかけとなり、2015年度は3人の4年生が以下のテーマで、課題研究に取り組んだ⁷。

学生1：ごっこ遊びにおける大人の関わり—創造世界に生きる子どもから—

学生2：遊びを広げる環境設定—「赤ちゃん・サロン」における子どもの遊び—

学生3：乳児期の人見知りと極端な癩癩について—A児の行動に注目して—

このような成果につながる点から振り返ると、保育者を目指す学生の育ちとして、「子育て支援」の活動を捉えることができる。親子との出会いを通して、学生自身が一保育者として、親子の育ちに真に向き合い、常に課題を持ち続けていくという、保育者の質的向上の歩みを、卒業研究を通して体感したのではなからうか。これから保育者と

して巣立つ学生には、「赤ちゃん・サロン」でのかかわりが、自身の学びの深化のみならず、下級生へ一つのモデルとして示すという点でも、意義があると言えよう。

5. 保育者の専門性—「チームワーク」と子育て支援

チームワークは、保育者の資質として求められる専門性の一つであると言える。「赤ちゃん・サロン」は大学間連携共同教育推進事業として行っていることから、「チームワーク」のループリックを用いて、振り返りを行った。

表3 「チームワーク」のループリックの変化

① チームワークの話し合いへの参加について	
4月	話し合いでは、関連した発言までに留まっていた。
2月	建設的な発言を積極的に行った。
② チームメンバーの話し合いの参加の促進	
4月	あいづちやうなずき等での態度で示すことまでの傾向である。
2月	それぞれに関連付けた発言ができるような流れを作り出していた。
③ グループワークへの個人の貢献	
4月	作業の遂行に協力していた。
2月	課題の達成の貢献へとつながった。
④ チームの雰囲気作り	
4月	メンバーに合わせた発言や行動であった。
2月	チームの雰囲気作りのため、フォロー及びサポートがあった。

回答したのは、本学の4年生スタッフである。また、一年間の自分たちの「赤ちゃん・サロン」の営みを通して、全体像を描き出すことができるように、年度末に実施した。スタッフという立場で、開始当初4月の実際の様子、また年度末2月の姿について、学生自身が一年間を振り返る中でも自分を知るという貴重な機会となった。表3に記した4月と2月の自分達の姿の違いから、これまでは学生同士による表面的な話し合いで終えていたが、「サロン」では、学生各々の思いや考えを伝え合い議論できる場所として学んでいたことが分かる。

上記表3の変化からも明らかなように、参加する学生個々が、「赤ちゃん・サロン」のスタッフとして当事者意識が高まり、一保育者としての責任や保育チームに所属する役割を、一人ひとりが

自覚し行動するようになったと考えられる。

6. 今後に期待する学習と効果

「赤ちゃん・サロン」の2年目の活動を通して、今後、学生に以下の学習が期待できるであろう。

【4年生】

- ①大学での学びを総合的に実践でき、単なる観察ではなく主体的なかかわりの視点に立って記録に残すことができる。
- ②毎回の活動を通して、PDCA サイクルを自然に身に付けている。
- ③実践の指導者として、後輩を意識して行動することができる。
- ④活動に参加して得られた気づきや疑問を、卒業論文（卒業研究）に活用することができる。
- ⑤最終的に得られた学びが、保育者の専門性としてつながりを持つ。
- ⑥社会人として求められる責任を自覚し、企画力、対応力、コミュニケーション力を実践の中で伸ばしていくことができる。

【3年生】

- ①実習での学びとは異なる実践力・対応力が身に付いていく。（乳児とその保護との対応）
- ②乳幼児の発達の段階を、授業やテキストでの学びを土台として、体系的・実地的な知識として定着させることができる。
- ③周辺の参加をしながら活動のノウハウを学ぶことができ、次年度スタッフを志す学生の動機づけ、身近なモデル像の獲得につながる。

【1・2年生】

- ①子どもとの自然なかかわり方を、先輩学生の姿勢・対応から見て学ぶことができる。
- ②専門分野の学習前に、乳児を中心とする子どもの成長・発達を間近に見ることで、授業における理論的学びに対して意欲的に取り組みやすくなる。
- ③自己の適性について、早い段階から考える機会が得られる。

以上、学年別に「期待できる学習効果」を挙げてみた。これらは、筆者ら担当教員が、活動を通して参加する学生の様子から、達成目標としてまとめた内容である。ただ、上述した「期待できる学び」は「赤ちゃん・サロン」の参加だけで得ら

れるものではないことも確かである。実際、4年生は幼稚園・保育所での実習体験が保育者への志望固めにつながり、2年生・3年生の場合は、授業での学びや実習体験を通しての学びの影響も当然ある。しかし、“実習や授業だけでは得られにくい内容”を、このサロンでの活動は含んでいる。

4年生に「期待できる学び」①～⑥のうち、特に①については、実際の記録によれば、明らかに主体的なかかわりの視点を持って描き出されていく展開が見られる。実習では、実習先の指導担当者から受ける助言を基に観察・記録を行うため、ともすれば自分の感想や気付きよりも、指導担当者の視点に立って捉えがちになる。そのため、いかにも保育者の観点というような書き方を強調することになり、学生自らが感得した記録にならないことが指摘できる。しかし、「赤ちゃん・サロン」では、学生自らがかわる視点で、試行錯誤しながら準備する。そして、実際のかかわりの中で、主体的に気づき、応じたり、環境を再構成してみたり、を繰り返しているうちに、自身の姿の成長に気づくことが望まれる。

「主体的な気付き」については、小原ら⁸の調査でも同様の傾向が見られた。具体的には、「学生が子育て支援活動に参加したことで身に付く知識や技術」を5件法（よくあてはまる、ややあてはまる、どちらでもない、あまりあてはまらない、全くあてはまらない）で質問した際、「実践の中で学ぶ姿勢をもつことができるようになる」4.61（降順2位）、「自分の活動をふりかえることから気づきを得ることができるようになる」4.44（同6位）と上位に位置していた。

一方、本学の学生に学びの独自性が見られる点は、①の「大学での学びを総合的に実践でき、単なる観察ではなく主体的なかかわりの視点に立って記録に残すことができる」である。具体的には図10に示すように、「サロン」の前日までに、打ち合わせをしながら記録した環境図に、配慮事項や環境設定の意図を書いておく。そして当日サロン終了後に、スタッフ中心に振り返りを行う中で、気づきを「よかったね！」と「悪かったね！」と大別しながら書き込んでいき、次回に生かそうとしている点である。

小原らの調査では、「活動をふりかえり、次に

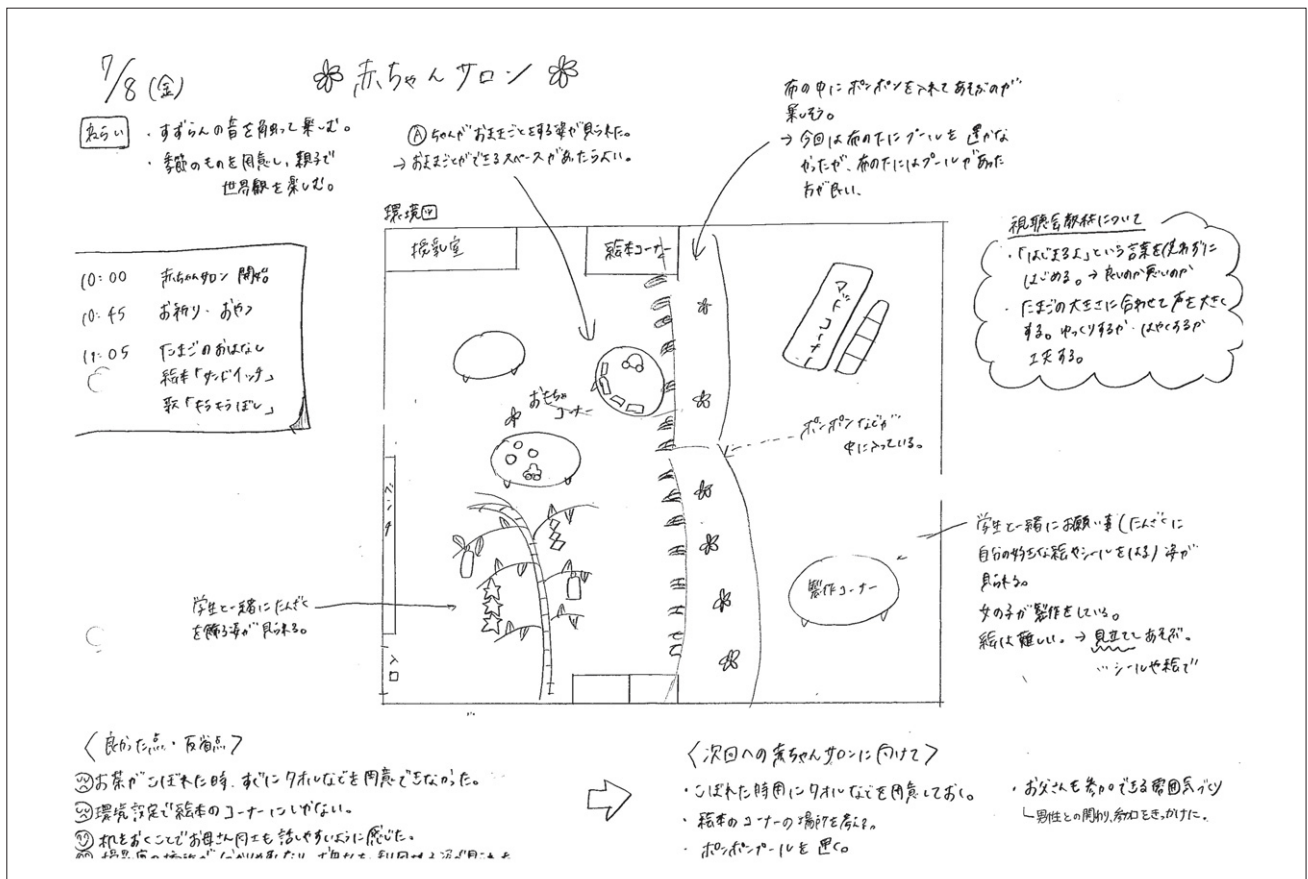


図10 引き継いだ環境図

生かせる記録を作成することができるようになる」は3.50（27項目中19位）と期待度は低くなっている。毎回の支援活動の内容やスタッフの継続性の有無により、また、参加者が短大生であるか、大学3～4年生であるかによっても、養成校の教員の期待度が変わる。その場かぎりの活動や体験で終わらせないためにも、学生に求める一つの要素として記録作成能力は、これから重要になるのではないだろうか。

また、下記の写真（図11）にあるように、毎回の活動を継続し、繰り返していく中で、活動の内



図11 赤ちゃん・サロンの一場面

容や、環境のあり方、自身の姿や仲間の様子を省察し、改めて次回を迎えようとしていることは、前述の②、③を反映するものと言えよう。

7. 考察 大学が行う子育て支援とは

大学が行う子育て支援は、単に場所の提供で終わってはならない。学生には、大学における学びと経験を往還させることで、実感を伴った学びとなることが期待できる。参加保護者には、子育てを楽しみかつ自信を得るような場であり、前向き志向の生き方支援となることを目指したいと、筆者らは考えている。

学生の学びに関しては、「5. 保育士の専門性—チームワークと子育て支援」の項で述べたように、教員の指示で動くのではなく、学生スタッフ同士の連携、協力も学びの重要な要素である。小原らの調査でも、「スタッフ同士で協力して活動を行うことができるようになる」4.17（降順4位）、「スタッフ間でそれぞれの役割を担えるようになる」4.39（同7位）、「スタッフの間でかわり方や環境構成について相談できるようになる」4.28

（同9位）と、身に付けてほしいとの期待度は大きい。保育士の専門性として、チームワークは不可欠であり、本学の学生の場合は、「チームワークのループリック」によって獲得しつつある（「建設的発言を積極的に行った」との自己評価）ことが確認できた。

また、「2-3 地方自治体との連携の実態と課題」に記したように、今後は大学と地元自治体との連携により、双方の利点を活用した総合的な子育て支援のあり方について検討していく必要がある。

8. おわりに

筆者らの所属する大学所在地である石川県では、保育所を中心に認定こども園への移行が進んでいる。具体的な数字を示すと、石川県内では2015年度に幼稚園57園、保育所269園、認定こども園87園であったが、2016年度は幼稚園51園、保育所243園、認定こども園118園となっており、こども園への移行が顕著である。大都市の保育所不足が深刻であることに比べると、本県の状況は恵まれている感はあるものの、それぞれの地域や保護者・各園の抱える事情や課題が皆無とは言えない。就学前の子どもの幼児教育と保育を一体的に行うこども園が増えることが、子どもの最善の利益につながり、子育て世代の保護者に対する支援が手厚くなることを歓迎する一方で、この子育て支援制度に“入れない”、あるいは、“入らない”子どもとその保護者に対して、保育者養成大学には何が必要で、何ができるのか。また、そこで学ぶ学生に、子育て支援に関してどこまで理解しておくことが求められるのか、養成校として学生に伝えるべき最低ラインの設定が今後不可欠であると考えられる。

筆者らの大学では、保育所実習Ⅱの課題に「実習園の子育て支援に参加して（またはヒアリングを行って）レポートを作成する」ことを課している。指導保育士と相談し、可能であれば、「連絡帳を見る」という試みも加えており、実習先によっては学生の力量を見て「保育士の指導のもとで連絡帳を書く」経験もさせていただくことがある。それでも、実習中に子育て支援を知り、体験できる機会は限定的である。

子育て支援の活動に参加する中で、保育者を目指す学生は子育てについて、あるいは子育て支援について、保護者に何を伝えていくべきなのか、難しい課題である。しかし、「サロン」で保護者の生の声を聴いて共感するなど、実際的なかわりがある学生であれば、表面的な学びの記述で終わらせることはないと考えられる。事実に基づき、伝えるべき事項や保育者としての願いを文章で表すことができるであろう。保育者になってからは、自身の人間性が現れた喜びなどの感動を保護者と共有し、責任を持った上で言葉に示すことになるであろう。子育て支援参加の様々な機会を通して、養成課程で学ぶ間に子育て支援の視点も持ち合わせた保育者に育てていくために、今後はさらに学生の学びの姿を把握しながら、アンケートの分析結果を有効に活用していきたい。

〈注・参考文献〉

- 1 本研究は、文部科学省大学間連携共同教育推進事業補助金及び北陸学院大学共同研究費の助成を受けて行うものである。
なお、既にいくつかの大学や、協同研究チームとして同種のアンケートを実施している大学もある。本学が実施した趣旨とは必ずしも一致しないため、本研究においては部分的に参考としている。
- 2 小原敏郎・入江礼子・中西利恵・直島正樹・石沢順子・三浦主博『保育者養成校が行っている“子育て支援”活動に関する調査研究報告書』（保育者養成における子育て支援研究会 2014年3月）
- 3 松田純子・矢萩恭子「保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究（2）」は保育学会第68回ポスター発表（2015）
- 4 実際の質問項目は表2のとおりである。グラフでは、表示スペースの都合上、簡略化して表記した。
- 5 赤ちゃん・サロンの活動日の内容、時間帯は、熊田・山森「大学における子育て支援の取り組み（1）－北陸学院大学における「赤ちゃん・サロン」の試行と環境づくり－」『北陸学院大学・北陸学院短期大学部研究紀要 第8号』（2015年3月）にも記してあるが、参考のために、以下に再掲する。
「赤ちゃん・サロン」の開室時間帯は10:00～11:30（その後13:00まではランチルームとして利用可能）としている。「赤ちゃん・サロン」における好きな遊び

コーナーとは、各会において学生が準備した遊び（新聞プール・製作遊び・絵本を置いてある場所・木製の玩具をおいてある場所）のことをさす（10:00～10:30の時間帯）。ふれあい遊びとは、身体と身体が触れ合う遊び方を学生と乳児、あるいは学生が示すことによって親子が遊ぶことをさす。おやつタイムとは、親子にお茶とおせんべいを配布し、こども讚美歌「ちいさいおてて」を歌い、祈る時間帯（10:30～10:50くらい）のことをさす。見て触れて動いてタイムとは、学生が作成した教材に触れる機会、あるいは教材によるお話を聞く時やそのお話から身体を動かして遊ぶ時間のことをさす（10:50～11:30）。

6 本学では、保育実習受講者を対象に、実習前に子どものかかわりを学ぶ「プレ実習」体験を課している。

保育実習Ⅰの前に、金沢市の教育プラザ富樫の「子ども広場」で半日の体験を4回以上、実習園でのプレ実習を2回以上設定している。

7 詳細は、『ほくりくがくいんだいがく 赤ちゃん・サロンプロジェクト』2015年度活動報告書 pp.23-28にレジユメを掲載している。

8 注2に同じ p.21